

4・14 医療・介護支援報告会

100人を超える職員・組合員が参加

「初期の役割は果たせた」

尼崎医療生協の東日本大震災対策本部（本部長・船越正信理事長）は14日、これまでに被災地で医療・介護支援活動を行い、帰任した医師、薬剤師、看護師、介護福祉士、事務による報告会をあおぞら会館で開催しました。この報告会には100人を超える職員・組合員が参加しました。

報告会の冒頭、船越理事長が「困難で過酷な条件の下で、これまで16人、延べ126人の支援を送ることができた。参加した支援者、職場を支えてくれた多くの人に感謝したい。組合員の奮闘で600万円を超える支援募金も寄せられた。支援者からの報告を聞くと、救急・救命から、生活支援に重点が移



り、長期的な視点に立った支援の継続が求められている。尼崎医療生協グループとして、医療・介護支援の継続とともに、ボランティア支援も必要」とあいさつしました。

「阪神大震災以降の経験を生かして、長期的な支援を担おう」と強調

第3次医療支援隊に参加（3月26日から4月2日）し、宮城県多賀城市最大の避難所となった多賀城市文化センターでの医療支援活動に当たった宮城和男医師（萌CL所長）がパワーポイントを使って報告しました。市文化センターは、市民会館、大小の音楽ホール、埋蔵文化財調査センターからなる複合教育施設。大小のホールは震災被害で閉鎖中。残されたスペースに最大時で2,412名が避難し、宮城医師が医療支援に入ったときは850名が避難していました。

「施設の構造が複雑で、全体の把握が困難」「清掃や消毒など、衛生面の課題も手付かず。行政も十分機能していない」と、大規模避難所であるが故に行政やボランティアの援助も適切に受けられていない問題点を指摘しました。こうした困難な中でも、医療支援のためのマップ作りや、プライバシー保護のための更衣室の確保、ミニデイサービスの立ち上げなど、高齢者や障害者の避難生活支援のために力を注いできたことを報告しました。そして、「阪神大震災以降、避難所から仮設住宅、復興住宅の人たちの医療やケアを担ってきた民医連と医療生協の役割は重要。これまでの経験を生かし5年から10年を視野に入れた長期的な支援を担う必要がある」と強調しました。

民医連、 医療福祉生協連 の一員でよかった



「機会があればまた参加したい」 支えてくれた職場や家族に感謝。

報告会では、第2次で参加した仁田勝大事務主任（潮江診）、第3次の阪上亜紀子師長（本田診）、石川和寿看護副主任（病院2階東病棟）、第4次の井上亜子師長（萌CL）、安田耕治介護福祉士（虹の会）、吉田伸隆介護課長（ひだまりの里）が、それぞれの支援内容と今後の課題を報告しました。

報告者が共通して強調したのは、「いざという時にすぐ動く民医連や医療福祉生協連の一員であってよかった」「被災者の笑顔に触れ、また、現地の職員のがんばりに触れ、後ろ髪を引かれる思いで帰任せざるを得なかった。機会があればまた参加したい」「派遣を支えてくれた職場や家族に感謝している」ということでした。

第5次医療支援隊は21日に出発

第4次まで尼崎医療生協独自で医療・介護支援隊を派遣していましたが、長期的な継続支援を視野に、第5次医療支援隊から、兵庫民医連としての支援に切り替わります。

21日に出発する第5次医療支援には、訪問看護ステーション菜の花の西村栄子所長、潮江診療所の石本典子看護主任、尼崎医療生協病院の多田安希子医療ソーシャルワーカーの3人（15日現在）です。

みやぎ県南医療生協支援は18日に出発

報告会で、福島専務（副本部長）がみやぎ県南医療生協周辺を視察（4月10、11日）したことを報告。第4次医療支援で県南医療生協に入った看護師、介護士の報告からも、看護師を含む医療支援や入浴介助の継続が必要であり、沿岸部の組合員の安否確認もできておらず、18日の出発で、みやぎ県南医療生協支援を行う方針を提起しました。

支援募金 600万円を超える

<全日本民医連の被災地支援>

支援者到達（14日現在）：2003人（医師319、薬剤師117、看護師571、技術系386、事務他610）
本日の支援者数は（移動含む）195人。延べ数は9359人となりました！

みやぎ県南医療生協支援は、民医連と医療福祉生協連が協同して支援

4月13日付の「救援ニュースNo.26」の「みやぎ県南医療生協に対する支援活動を強化しよう」の内容に誤解を招く表現がありました。正しくは、民医連も医療福祉生協連も協同してみやぎ県南医療生協を支援することが確認されています。お詫びをし、訂正します。